

御伽草子

御伽草子とは、狭義的には、享保頃、大坂心齋橋の書肆渋川清右衛門が同じ体裁で刊行した渋川版二三篇のことを指し、広義的には、室町期を中心とした鎌倉末期から江戸初期にかけての短篇小説の総称を指す。大部分は、童話的意味あいの濃い作品が多いが、題材も広汎で、大衆文学確立としての意義は大きい。

(1) 文正草子

(黒川文庫)

写本二冊 横綴奈良絵本 奥書なし 「御伽草子」一〇巻(二五冊) 「ぶん正・ささやきたけ・つき嶋・ほうらい山・つるのさうし・こわたきつね・むばかわ・いは屋・中将姫・さころも」のうち的一篇。
別称は、「ぶんしゃう」、「文太物語」、「塩壳文章」などがあり、物語成立は、室町中期頃で、平民の立身出世談である。この文正草子は、めでたい出世物語であることから、女子は、冊子の読み初めとして、この草子を読む習慣が、少くとも宝永頃までは行なわれていたらしい。

(2) ささやきたけ

(黒川文庫)

写本三冊 横綴奈良絵本 奥書なし (1)の「御伽草子」の一篇。
物語成立は、室町期といわれる地名由来談で、鞍馬僧正ヶ谷の由来伝説を説いている。ささやき竹とは、神託と詐称に用いる奇具である。

(3) はちかつぎ

(黒川文庫)

版本三冊 横綴白描絵入 無刊記「享保頃」、「御伽草子」二〇巻(三四冊) 「はちかつぎ・小町さうし・御さうし嶋わたり・からいとさうし・こわたきつね・ななくささうし・さるげんじ・物くさ太郎・さされ石・はまくり草紙・小あつもり・二十四孝・ほんてん国・のせさる・ねこの草紙・一すんほうし・はまいて草紙・さかき草紙・よこふえ・しゅてんとうし」のうち的一篇。
はちかつぎは、「鉢かつぎ」であり、物語成立は室町頃で、十三の時、母の臨終に際し、一個の鉢を頭に載せられた女子の物語で、その鉢の不思議が題材となる継子譚で、長谷の観音の力で、幸福になる霊験記でもある。

(4) 若草物語

(黒川文庫)

写本一冊 美濃判 八行書き 奥書なし
主人公若草の継子及び悲恋遁世譚である。若草が思いあまって、宇治川に身を投げると、老僧があらわれ、救われる。後に、その老僧は清水の観音であることがわかるなど、「はちかつぎ」同様、靈験記的色彩の強い物語である。

(5) 精進魚類物語

(黒川文庫)

写本一冊 美濃判 十一行書き 奥書なし
別名「魚鳥平家」ともい、室町期の成立で、「鴉鷲合戦物語」と同様、異類物で、「平家」に模して、精進物と魚類との合戦を戯作したものである。結果は魚類の敗北によって物語は終る。